# 切り離されない社会で切り離されない教育を
## ——教育の中における障害児差別について——

福井達雨

☆ **義人ちゃんと遊ばへんで**

私には、義人、生、啓示という三人の子どもがいる。この三人は、障害をもった子どもたちの世界で育った、障害をもたない子どもである。

長男義人が幼稚園に通うと、重い知恵おくれの子どもの施設、止揚学園内にある私の家に、友だちが遊びにくるようになった。

しかし、重い知恵おくれの子どもを見ると、初めのうち、幼稚園の子どもたちは、「コワイ」「キタナイ」と言って、必ず逃げてしまった。

ある日、義人が、目にいっぱいの涙をため、

「おとうちゃん、止揚学園の子どもは、なんでコワイんや。キタナイんや」と、たずねにきた。

「そんなことあらへんがな」と、答えると、

「そうやなあ。止揚学園の子どもは、きれいな服きてるし、やさしいなあ。そやのになぜお友だちは、コワイ、キタナイと言わはるんや」

義人の涙は、障害児が、恐い、きたないと差別された怒りであったろう。

私は、その涙に答える術がなかった。

町の子どもが、よくこんなことを言った。

「義人ちゃんらと遊ばへんで」

「どうしてや」

「あんなあ、お母ちゃんがなあ、止揚学園に遊びに行ったらあかんて言わはった。あそこの子は、アホで、キタナクて、コワイし、アホがうつるから気いつけて言わはった。義人ちゃんら、止揚学園の子どもやろ、コワクてキタナクてアホやろう。だから遊ばへんねん」

また、こんなこともおきた。

私たちは、障害児の教育権を守り、普通児が、目に見えない心に、豊かな人間性の育つ教育をうみだしたい。こんな願いから、日本で初めて教育権運動をおこしたグループである。

八年前、精神年齢六ヵ月位の重い知恵おくれの子どもたちが、

小学校に通学し、今は、算数国語をのぞいては、普通児と同じ教室で共に教育をうけている。しかし、八年前は、みんなが冷たく、差別も多かった。その時期、義人が小学生になり、止揚学園の子どもと共に通学を始めた。

「義人君、あんな子とよう平気で手つなげるなあ。お前アホとちがうか」

「お前とこのお父さんアホやなあ。アホな子とうれしそうに歩いてはったで」

小学校の子どもたちが、何の悪さも意味も感じず、無意識に両親や大人の言う通りに発言し、義人にそれをぶつける。性格の弱い義人は、登校拒否の心理病にかかってしまった。私は、学校にこの問題の対処をお願いした。言葉で、小学生に注意が与えられた。しかし、心の教育が、言葉でできるだろうか。先生が手に豆をつくり、額に汗をし、身体を汚し、教育の土方になって、その汗のにおいを、子どもの心身に移行してくださらないかぎり、どうして心の教育ができるだろうか。

当然、この問題の対処はとれなかった。

父親の職業に、子どもが差別され、犠牲になった。私は、〃負けるな。がんばれ〃と心の中で深い祈りをもっていたが、具体的には、何もしてやることができず、義人は負けた。

しかたなく、電車で通う、ある市の私立小学校にかえざるをえなかった。こんな冷たい、悪い日本人、教育の場、社会があってよいのだろうか。しかし、これが現実の日本人、教育の場、社会なのである。この中で、義人の涙に、私は何を答えることができたであろうか。

☆　**切り離されない教育を**

義人、生、啓示は、生まれた時から、障害児たちと一緒に風呂に入り、食事をとり、切り離されない社会の中で、共に切り離されない教育をうけてきた。しかし、多くの子どもたちは、障害児と切り離された社会の中で、切り離された教育をうけ、乳児期から幼児期にかけての大切な性格形成期に、まちがった障害児観、人間観を、両親や社会からうえつけられてしまった。

特に、0歳期、言葉でなく、皮膚接触の感覚で性格が形成される時期に、両親や大人が、〃障害児は、劣等で、コワイ、キタナイ〃と、心の中で感じる。それが、感覚をとおして、子どもの潜在意識の中にうえつけられる。

障害児であろうと、それが刺激になって、〃コワイ、キタナイ〃という潜在意識が意識にかわり、子どもたちが、障害児に対してまちがった考えや、差別をするのは当然である。この切り離し社会における切り離し教育が、障害児を不幸にした一つの原因にも

なった。

今、私たちは、このような差別をなくそうと、施設を統合増大し、地域社会から離れた山や野原に建て、障害児を隔離することに疑問をもち、施設を分離縮小し、町の中に建て、個の連帯をうみだす一つの方向を進めている。

それは、団地の真中に家を建て、四人の子どもと職員がそこで生活をし、町の子どもと共に遊び、生活する試みを今年から始めたのである。この試みが成功すれば、だんだん止揚学園を縮小し、いつかは止揚学園をなくして障害児が胸をはって歩ける日本の社会をつくりだしたい。

切り離されない教育をうけた義人、生、啓示と、切り離された教育をうけた私は、あきらかに障害児観と人間観に違いがあり、それを三人の子どもから教えられるたびに、私が、障害児たちを今もいかに差別しているかを知り、その自分に、激しい怒りを感じる。

教育とは、教えることではなく、教えられることだと、シミジミと思う。

☆　ためにではなく共にの教育を

止揚学園には、町の子どもが遊びにくるようになった。重い知恵おくれの子どもが、遊具にのっていると、

「おっちゃん、あの子アホでかわいそうやから、僕のりたいけれどしんぼうするわ」と言って、遊具で遊ばない。

そこへ、義人たちがやってくると、

「お前ずるいぞ。一人じめしたらあかん。みんな待ってるから順番にのれ」と言って止揚学園の子どもと喧嘩になる。

今の道徳教育からいえば、町の子は、模範的なやさしい子で、義人たちは、かわいそうな子をいじめるいじめっ子、悪い子としてあつかわれるであろう。しかし、義人たちにとっては、障害児は、自分の仲間で、友だちであるので喧嘩になり、町の子にとっては、かわいそうだと差別し、自分よりも低い子だから喧嘩にならない。いったいどっちが正しいのであろうか。

先日、義人、生と汽車に乗っていたら、重い知恵おくれの子どもが乗ってきて、奇声をあげはじめた。私は、〃カワイソウニ〃と思って下をむいてしまった。しばらくすると、生が大きな声で、

「重い知恵おくれの子が乗ったはる」

と言うと、その子の所に走って行き、遊びはじめた。しばらくすると、その子が泣きやんだ。でも、私は、下をむいていたのである。

また、先日、義人と歩いていると、盲人の方が、四ツ角でウロウロされていた。

「オイ、義人、あの人目が見えなくてカワイソウやから助けてこい」と、私が言うと、義人は不思議そうに、
「お父ちゃん、何でカワイソウなんやねん」
「そら、目が見えんからカワイソウやろう」
「お父ちゃん、あの人、道がわからんので困ってはるだけや。僕、道を教えたるわ」
義人は、盲人の所へ走っていった。
私は、二十三年間も障害児差別の戦いをし、むずかしい障害児差別の理論を頭にもっている。
義人たちは、十年位しかこの子どもたちと共にいず、むずかしい差別理論ももっていない。しかし、障害児と共に生活する中で、正しい人間観を身につけているのである。
私は、まちがった幼児教育をうけてきた。幼い時のある日、
「あの子カワイソウやで助けてやった」
と言うと、先生が、私の頭をなで、
「よいことをしましたね」とほめてくださった。
私は、うれしくて、カワイソウな子がいたら、もっと親切にして、あのやさしい先生にほめてもらおうと思った。その気持ちが、障害児や私を不幸にしてしまった。
「あの子を差別して不幸にしたのは、あなただし、私なのよ。だから、真剣に謝ってあの子と共に歩みなさいね」
こんな幼児教育をうけなかった。
私の受けた幼児教育は、「カワイソウな子どものために」という教育で、「障害児と共に」という教育は受けなかったのである。
こうして、私は、どうしても障害児を差別してしまう不幸な人間に育ってしまった。多くの日本人もこのような教育をうけ、冷い心をもつ人間につくりだされてしまったのである。

生命は、一度おかされたら二度と生きかえらないもの。誰もおかすことができないほど大切なもの。地球よりも重たいほど大切なもの。この大切なものを……この大切なものを、私たちは、無意識のうちにおかしてきたのである。
乳児期、幼児期の教育は、恐ろしいものである。子どもは、人間の子どもである。子どもの時、目に見えないもの、美しいもの、生命の大切さを心に深くうえつけられた子どもは、大人になって、どんなに幸いであろうか。
普通教育をしている人たちで、障害児教育に無関心な人も多いが、実は、障害児を幸福にするか不幸にするかは、普通教育をする人たちの心や行動にかかっていると、私は考えている。

（止揚学園）